

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 14 NO. 2

(通巻53号)

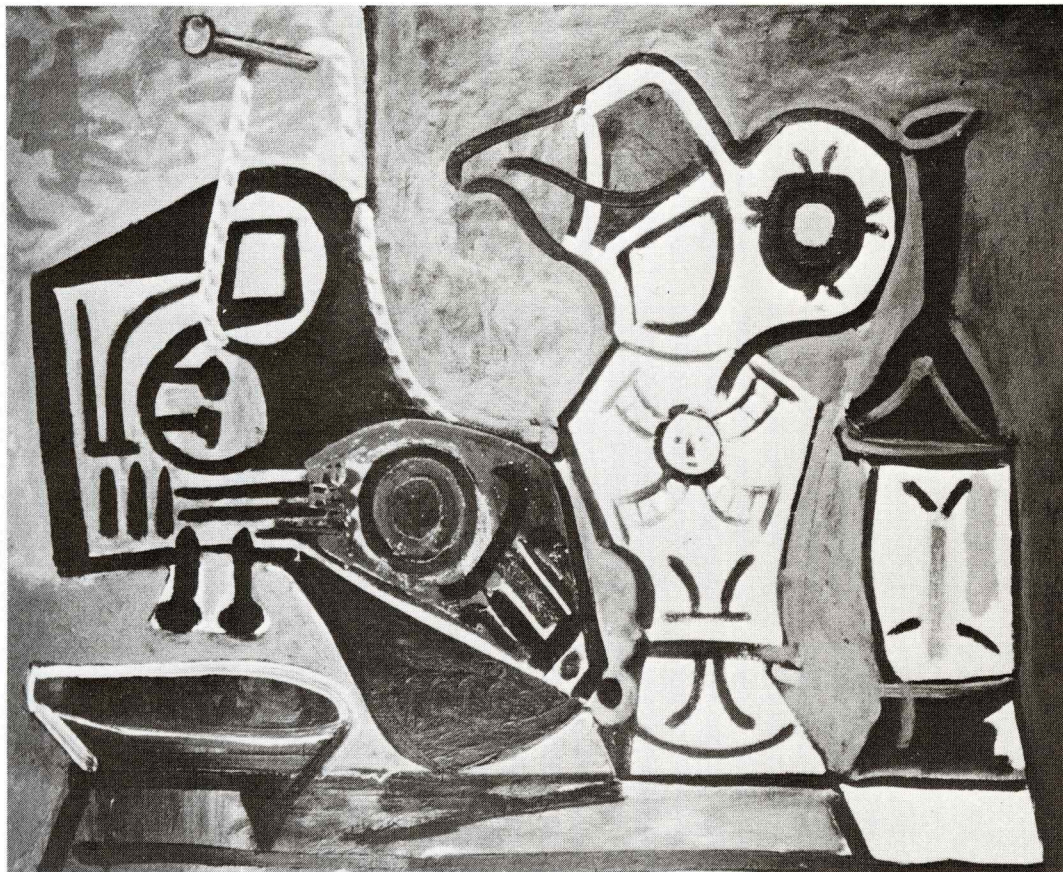
昭和62年7月15日発行

編集・発行人 藤川 昶

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)



ピカソ「マンドリン・壺・びん」 油彩 1959(ピカソ展出品)

ピカソの取り上げる主題には、印象派やフォーヴの画家たちの重要な主題であった風景よりも、むしろ人物が、身近な日常の静物が多くあらわれます。コップ、グラス、果物をはじめ、ヴァイオリン、マンドリン、ギターといった楽器、あるいは、新聞、トラップなど、手に触れることに意味を持つような事物がしばしば画面に登場します。実際、これらの事物を、あたかも手に触れる如く、あらゆる方向からとらえ、しかも絵画の二次元的空間を意識しつつ、平面的に画面に再構成しました。この表紙の作品もピカソ独特の方法により形態の把握と構成がなされています。ピカソは、セザンヌの「自然は球と円錐と円筒に要約することが出来る」という考えを実践して事物を単純な幾何学的形態に還元したばかりでなく、伝統的な視覚遠近法を無視した新しい造形方法のキュビズムを展開させました。ピカソは、常に独創的なスタイルを開発し、現代美術のリーダー的存在として君臨しました。没して今なお、その影響の大きさは図り知れないものがあります。

みる
(展覧会)

特別展

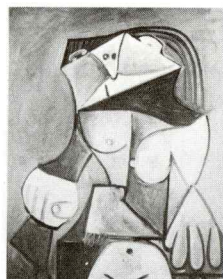
— マリーナ・ピカソ・コレクション —

ピカソ展

少年時代から晩年までの絵画・素描・陶器を展覧

Picasso

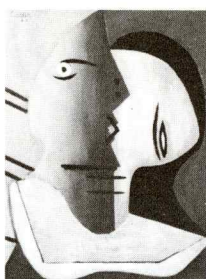
'87・8・7(金)〜9・6(日)



坐る裸婦 1959



灰色の服の女 1943



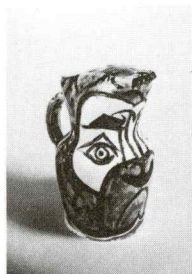
顔 1926

パブロ・ピカソは二〇世紀最大の芸術家といわれています。その多様な作風は、今日の芸術に多くの問題を提起し、深い影響を及ぼしています。ピカソは一八八一年一〇月二五日、スペインのマラガに生まれ、一九七三年四月八日、南フランスのムージヤンで満九一歳の生涯を閉じるまで次々と新しい道を切り開き、優れた作品を残しました。ピカソがその生涯に制作した作品は数万点にも及ぶといわれています。ピカソの芸術は余りにも多彩で幅広く、その変遷を明確に示すことは困難ですが、各時期の主たる傾向からピカソ芸術に触れてみたいと思います。

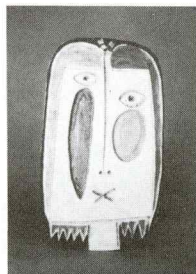
ピカソは、美術教師である父の指導で絵画の勉強を開始し、後にマドリードの王立アカデミーで学びましたが、ピカソ芸術の本格的な歩みは、フランスとの関わりにおいて

始まったといっています。ピカソは、一九〇一年、初めてパリで個展を開きましたが、このころから青を主調色とした哀調ある「青の時代」と呼ばれる作風を特徴として貧しい人々をモチーフに描きました。一九〇四年にはパリに定住し、その翌年ごろからは明るい色調の「ばら色の時代」に移り、抒情をたたえつつも、やはり一抹の哀愁を帯びた道化師や曲芸師を好んで取材しました。その後はセザンヌの作品や、黒人芸術から深い啓示を得て造形追求へと向かい、これまでの画面にみられた感傷的な要素を除き、「ニグロ時代」、そして一九〇八年ごろから「キュビズム」という表現様式を生み、理智的な画面構成を形成しました。対象の解体と再構成、あるいは画面に数字や文字を入れたり、紙や布をはりつけたりするなどの手法を取り入れ、特

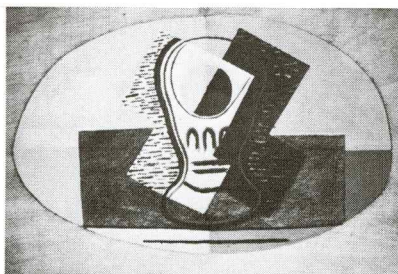
殊な効果に意を注ぎました。さらに、一九二〇年頃から「新古典主義時代」としての量感に富んだ女性像の創造、一九二五年ごろからは幻想的なシュルレアリスム運動に接近するなど、没するまで絶えず様々な変貌をみせました。ピカソのように、その各エポックがそれぞれ充実している画家はきわめて珍しいといえるでしょう。また、スペイン動乱をテーマにした「ゲルニカ」のように戦争の残酷を示す作品が多いこともピカソの一面を伝える格好のものとなっています。「絵画とは、私にとっては破壊の集積である」と宣言するピカソの種々の造形的冒険の中でも、ピカソをピカソたらしめているのは、ブラックとともに、現代芸術の源泉ともいわれるキュビズムを創始したことが挙げられるでしょう。キュビズムは、セザンヌの絵画思想からヒントを得て、さまざまな対象を基本的な幾何学的形態に還元して



尖った注ぎ口を持った酒壺



四隅の丸い長方形の陶板



グラスのあるコンポジション 1922



17世紀のスペイン人
1967

構成したところから出発しました。この際に、「小さなキューブ（立方体）」の集まりで描かれている」と評されたことがこの名称の起源といわれています。このキュビズムも、「初期キュビズム」、「分析的キュビズム」、「総合的キュビズム」といった具合に展開しますが、その展開で造形方法の基本となったのは、ルネッサンス以来の絵画の重要な要素であった視覚遠近法にとられない空間構成です。これま

キャンヴァスの上でも長方形としてあらわさないのか。テーブルの上のコップの口はこのように円いのに楕円形に描く。もし脳裏にある真実のテーブルを描けといったらどうするだろう。プランセは、「真実」は眼よりも脳裏にあることを唱えました。詩人のアポリネールも、これまでの絵画との相違について触れ「視覚による真実から知性による真実へ」と述べています。この造形運動には多くの画家が賛同し、自己の芸術に反映させました。それだけに、キュビズムが芸術史上、どれほど革新的なものであったかがわかるでしょう。

このたび、同コレクションから選りすぐったピカソ一三

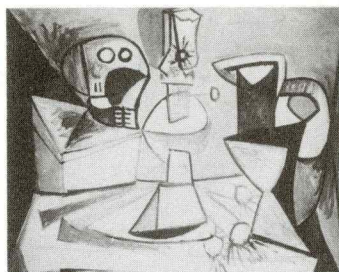


画家とモデル 1963

対象をとらえて画面に再現する方法ではなく、視点を自由に移動させて、同一画面上に対象の前方と後方の景観を、あるいは内部と外部の状況を同時に表現しました。例えばマンドリンでも、一つの方向から眺めるのではなく、さまざまな方向からみたその各面の特徴が自由に連結されて描かれます。この伝統的な遠近法否定については、ピカソの友人の科学者ブランセの言葉が端的に伝えています。「眼でみて描くテーブルは、われわれの脳裏にあるテーブルの正しい概念を伝えてはいない。遠近法にしたがってテーブルの面を台形に描くが実際は完全な長方形だ。それならなぜ

ピカソが没して四年後の一九七七年、もめ続けていた遺産相続問題にようやく決着がつき、そのアトリエや住居から発見された作品が遺族に相続されました。なかでも、ピカソが一九一八年、満三六歳の時、最初に結婚したロシアのディアギレフ・バレエ団のバレリーナ、オルガとの子であるポールの娘、マリナ（一九五〇）の所蔵となったコレクションは質・量ともに恵まれたものです。

・第四回 美術を語る会
日時 9月5日(土)午後2時
演題 「ピカソは現代をどうみるか」
話題提供者 牛政健治氏（版画家）

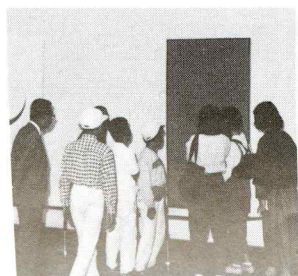


死者の頭部、ランプなど 1945

・第二回 美術講演会
日時 8月29日(土)午後2時
演題 「ピカソー愛と芸術」
講師 瀬木慎一氏（美術評論家）

・特別展
「日本の名画一〇〇年」展
を終えて
5月16日から6月21日まで開催した本展は、日本の近代美術形成上で欠かせない画家たちの名画で綴る激動の絵画史を一堂にみる絶好の機会だった。時代の流れを中心に展示した会場では、美術史的意味の大きい作品群に熱心に見入る美術ファン、現代絵画の多様な表現について語らう家族連れの姿が多くみられた。

美術講演会で本間正義氏はコレクションの形成と美術館運営のあり方を大光コレクションの形成から長岡現代美術館の崩壊を例に話された。美術を語る会で青木茂氏は日本の近代美術史の遅れと史料調査の身近な面白さを例を示しながら話され、参加者の体験談も加わり楽しい会となった。



企画展

第二回 現代日本具象彫刻展

'87.8.7(金)～9.6(日)

前回は上回る一二二点の応募

千葉市の農林水産畜産試験場跡地につくられる「青葉の森公園」は、都市部に残された貴重な自然であるが、公園内の「彫刻の広場」に優れた彫刻作品約20点を設置するため、公募展「現代日本具象彫刻展」を企画し、第一回展を昭和60年2月に開催した。

庭に仮設置され、一般公開中である。残り9点の作品を選定するため、第二回、第三回「現代日本具象彫刻展」の開催が予定されている。

全国より112点の応募

大賞6点、入選52点決まる

第二回現代日本具象彫刻展は、昭和62年3月、作品が公募され、7月4日、5日作品搬入が行われた。北は岩手から南は高知まで、全国19都府県、国外などから前回を上回る112点の応募があった。今回、特に目だった点は、応募者が全国的なひろがりを見せはじめてきたことだろう。

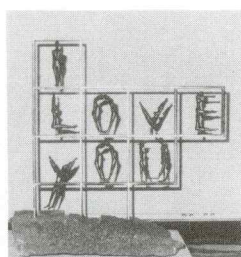
作品審査は、7月10日(金)、審査員(小川正隆、嘉門安雄、弦田平八郎、富山秀男、中村傳三郎、本間正義、三木多聞)全員の出席により行われた。はじめに58点の入選作品が決定され、その中から次の6点

が大賞に選ばれた。

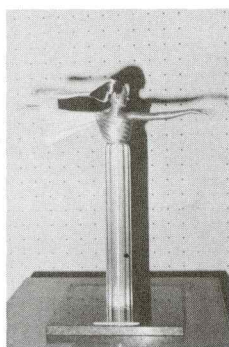
- 「女の門」山崎猛(茨城)
- 「生きるということ」浦野八重子(千葉)
- 「かくれんぼ」中嶋登茂美(愛知)
- 「I LOVE YOU」佐々木実(埼玉)
- 「ATHENA」関正司(千葉)
- 「森の番人」後藤良二(神奈川)

入選者は次の通りである。

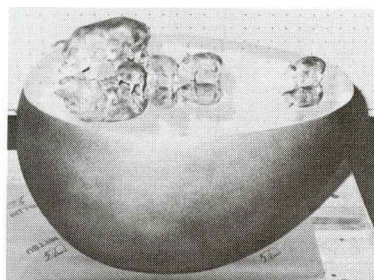
- ▽島根紹・東京▽吉田隆・石川▽梶本良衛・石川▽小川清彦・奈良▽西中良太・大阪▽



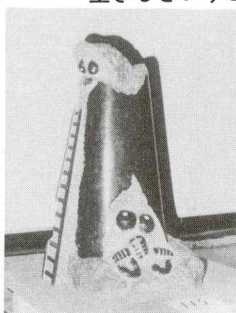
「I love you」
佐々木 実



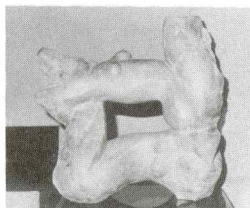
「ATHENA」
関 正司



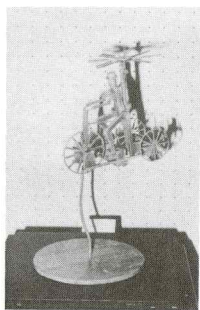
「生きるということ」浦野八重子



「かくれんぼ」
中嶋登茂美



「女の門」山崎 猛



「森の番人」
後藤良二

播間公次・大阪▽山根淳史・和歌山▽堀豊之・千葉▽岡弘・東京▽久村進・東京▽高橋秀夫・愛知▽中村宏・神奈川▽竹屋修・岐阜▽広川政和・千葉▽富永幸彦・埼玉▽辻忍・神奈川▽加藤昭男・東京▽堀内秀雄・愛知▽兼原啓二・茨城▽今野勝彦・千葉▽高崎哲・東京▽葉栗剛・愛知▽虎竹秀芳・千葉▽酒井良・千葉▽岡本参平・東京▽本田悦久・千葉▽北井博文・千葉▽青木三四郎・千葉▽鈴木徹・東京▽南部治夫・埼玉・中村義孝・茨城▽佐藤稔宏・埼玉▽尾崎真・埼玉▽高野佳昌・京都▽中川ともみ・京都▽田宮美弘・東京▽斎藤馨・埼玉▽高橋久美子・東京▽片桐稔・東京▽鈴木徹・千葉▽中野滋・神奈川▽長谷川大治郎・石川▽松本雄治・神奈川▽後藤敏伸・富山▽小寺真知子・東京▽伊田実智代・東京▽原田緑・東京▽高杉邦夫・千葉▽平戸美和子・千葉▽横内明美・千葉▽本木孝雄・兵庫▽岩坂登・千葉▽受付順

なお、この展覧会には、今回の招待作家柳原義達、鈴木実両氏の作品、及び前回の招待作家7名、大賞受賞者6名の作品なども展示される。

昭和62年度 常設 収蔵作品展Ⅱ期

今年度収蔵作品展第Ⅱ期は

2部に分けて構成しています。

美しい自然に恵まれた房総の地には、昔から多くの画家が訪れ、また住みついて、数多くの名作が生みだされてまいりました。第1部では、本館が収蔵している日本画、洋画の作品の中から、房総の風物をモチーフとした作品を紹介しします。

第2部では佐倉藩出身の明治期洋画界の巨匠、浅井忠の晩年の京都時代に焦点をあてて紹介しします。フランス留学より帰国後、明治35年京都高等工芸学校図案科教授として京都に移住した浅井は、関西美術院を創立し、多くの優れた作家を育てました。洋画界のみならず、工芸界においても、遊陶園・京漆園を仲間と設立し、陶芸や漆芸の世界に斬新な図案をもたらししました。この他、日本画、彫塑まで多方面に活躍した浅井の業績と併せて、浅井をめぐる京都洋画壇の作家たちの作品を御覧いただきます。

第1部

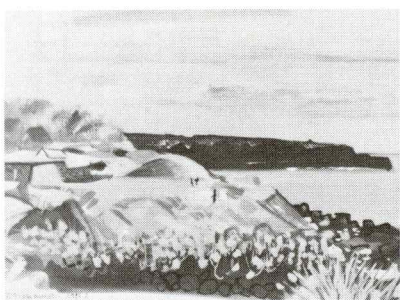
○日本画

富取風堂「朝光」、峯岸魏山人「九十九谷」、吉岡堅二「馬」、若木山「海女」他、渡辺学「夜明け」、岩崎巴人「波濤岩礁図」、加倉井和夫「穀機」

○洋画

小山周次「銚子犬吠埼」、大久保作次郎「丘上の鐘楼」、椿貞雄「鋸山から見た房総半島」、中西利雄「外房風景」、富田通雄「外房鶴原」、小堀進「海(白浜)」、寺田政明「犬吠灯台の見える外川港」

中西利雄「外房風景」



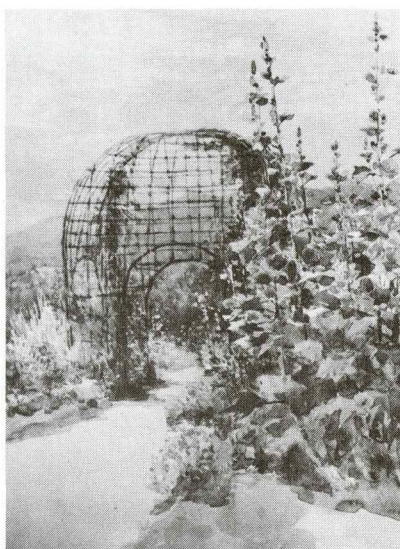
第2部

○京都時代の浅井忠

「京都高等工芸学校の庭」、「花」、「奈良郊外」、「中沢岩太像」、「東宮御所壁飾草稿(1)」、「老母像」、「婦人像」、「図案画稿(鉢の図)」、「図案画稿(戸棚図)」、「亀の図」、「種まきの図」、「盗賊」、「当世風俗五十番歌合(15番)」、「当世風俗五十番歌合(28番)」、「農婦像」、「農家風俗手塩皿」、「花瓶」、「東宮御所壁飾「武士の山狩草稿」、「月瀬紀行薫世界」、「吉野紀行錦世界」、「水彩スケッチ」、教科書、スケッチブック、書簡・絵葉書類、写真他。

○浅井忠をめぐる京都洋画壇の人々

牧野克次「松林」、伊藤快彦「林檎」、桜井忠剛「バラ」、小笠原豊涯「中井八重子像」、都島英喜「洛北の早春」、中林憊「冬の風景」、加藤源之助「秋の山(大和初瀬村)」、田中志奈子「デッサン(裸婦)」、柳原一広「南仏風景」、長谷川良雄「晩秋」、沢部清五郎「婦人像」、霜鳥之彦「緑のスウェーター」、間部時雄「田園風景」、黒田重太郎「浴後」、安井曾太郎「熱海附近」、梅原龍三郎「皇居」、田中善之助「聖護院の裏」



浅井 忠「京都高等工芸学校の庭」

ごあんない・団体展

●第23回千葉県小中養護学校児童生徒書写展覧会
6月30日～7月5日

●第63回習美会初夏大作展
6月30日～7月5日

(以上終了分)

●千葉県書道協会創立40周年記念書道展覧会
7月7日～7月19日

●第15回水彩連盟千葉支部展
7月14日～7月19日

●第8回龍峽書道会千葉県人展
7月14日～7月19日

●第16回千葉市勤労者文化展
7月14日～7月19日

●第21回漱雲会全国書道展
7月21日～7月26日

●第7回千葉サンケイ現代洋画展
7月21日～8月2日

●第7回中央美術協会千葉支部展
7月28日～8月2日

●日本水彩画会第3回千葉県支部展
8月4日～8月9日

●第16回写真千葉県展
8月4日～8月16日

●第12回葉美会展
8月4日～8月16日

次ページへ

かたる・つくる

(美術を語る会・実技講座等)

美術館実技講座

●版画講座

期日 7月25・26・28・29・31日

8月1・2・4・5・7・8・9日

〈8日間〉

講師 平野正房氏

定員 30名

●書芸講座(2)

期日 7月29・30日

8月1・2日

〈4日間〉

講師 千代倉桜舟氏

定員 30名

●洋画講座(2)

期日 8月25・26・27・28日

9月1・2・3・4日

9月16・17・18・19日

〈12日間〉

講師 太田洋三氏

定員 30名

締切 8月11日

期日 9月22・23・24・25・29・30日

10月1・2日

〈12日間〉

講師 デッサン講座(2)

期日 9月22・23・24・25・29・30日

10月1・2日

ごあんない・実技講座

定員 30名

締切 9月8日

期日 9月24・27日

10月13・25・27日

11月11・16・18日

12月11・16・18日

〈10日間〉

講師 神谷紀雄氏

定員 30名

締切 10月10日

期日 10月10日

8月7・8・9日

〈3日間〉

講師 戸田健夫氏

定員 30名

締切 7月24日

期日 9月1・2・3・24日

10月2日

〈5日間〉

講師 鎗田和乎氏

定員 30名

締切 8月18日

期日 8月18日

〈5日間〉

講師 鎗田和乎氏

定員 30名

締切 8月18日

期日 8月18日

〈5日間〉

講師 鎗田和乎氏

定員 30名

締切 8月18日

期日 8月18日

〈5日間〉

●第二回 別掲3ページ

美術を語る会

美術一般に関する問題をテーマとして行われる談話会。今回は、企画展「第二回現代日本具象彫刻展」と関連させて実施する。(4ページ参照)

●第三回 美術を語る会

日時 8月22日(土) 午後2時～4時

話題 「第二回現代日本具象彫刻展受賞作について」

話題提供者 同展大賞受賞者

場所 本館研修室

対象 一般50人

参加費 無料

●第四回 別掲3ページ

寄贈図書のご紹介

美術評論家の中村傳三郎氏より、昭和60年度に続き、図書・図録・雑誌等計194冊を寄贈していただきました。主なものは次の通りです。
〈図書〉高村豊周作品集、望月春江画集、絹谷幸二画集、黒田清輝素描集、

美術館研究員会議

本年度、第一回会議が7月11日(土)午前10時より開かれ、浅井忠関係資料の整理をしていくことを確認しあった。なお、研究員は、池田伊予、石倉総子、加曾利和夫、平戸美和子、大須賀久大、高木正田辺宏、南隆一、村田哲朗、綿貫啓一の各氏、10名である。

△増築工事について▽

県立美術館では、昭和62年度から二ヶ年の継続事業で増築工事を計画しています。

展示室 八五〇㎡

収蔵庫 五四四㎡

機械室 二八三㎡

工事期間中は、御迷惑をおかけすること存じますがよろしく願います。

高野真実画集、今井俊光画集ほか計54冊

〈図録〉加倉井和夫自選展

寺田政明展、青木繁展、

吉田善彦展ほか計123冊

〈目録・雑誌〉速水御舟、

三彩、古美術ほか計17冊

厚く御礼申し上げます。

ごあんない・団体展

——前ページから

●第11回尽墨会書作展

8月11日～8月23日

●第33回静雅書道会小中学部千葉地区展

8月18日～8月23日

●第17回いてふ会彫刻展

8月18日～8月30日

●第7回日本春秋書院千葉県書道連盟展

8月25日～8月30日

●昭和62年度千葉市教職員美術展覧会

8月25日～8月30日

日誌抄

5・15 美術館友の会役員会

5・16 特別展「日本の名画100年」(6・21まで)

5・23 第一回美術講演会

(講師＝本間正義氏)

6・20 第一回美術を語る会

(話題提供者＝青木茂氏)

7・3 美術館友の会旅行

7・11 第二回美術を語る会

(話題提供者＝高橋規矩治郎氏)

7・11 第一回美術館研究員

会議